
死にたいきみへ

宗像 佳世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたいきみへ

【Nコード】

N9218Z

【作者名】

宗像 佳世

【あらすじ】

廃ビルと自殺をきっかけに日常を見直し始め生死を問い直し始める私。自らの精神の崩壊を代償に見つけた答えとは。

（前書き）

まだ続きます。不定期更新（要望があれば早めに書きたいと思います）

最近見たニュースで覚えているものは確か自分の近隣で自殺があったということだった。全国版のニュースでやっていたものだったからてつきりそれが他人の日常のように思え、想定された事実だと片づけてしまった。我が家の情報屋が昨晚のプチ主婦会で、その現場は例のビルだとコロッケをつまみながら言っていた。その後の自分は自殺に対して「かわいそうね」という流行に乗った母の言葉に共感ではできなかったが例のビルが現場だったということがどうにも気がかりで仕方なかった。

例のビルとは町のだ真ん中にある廃ビルのことだった。バブル期に企業が建てたりゾート用の施設だと耳にしていたが、結局のところ人が東京に流れてゆくばかりのこの街には適することができずに捨てられたビルのことだ。都市化計画と称されながらもここにはいまだに一軒家や長屋が多く、むしろ捨てられたビルだけが俗世に倣《なら》っているような、ある意味死に死にとした街の象徴だった。ジャージやスーパーで買った服が認められた住人が黄ばんで捨てられたビルを時代遅れだと繰り返し返すことは子供の自慢大会にどこか似ているような気がしてならなかった。けれどもそれが住人同士の挨拶であり、自分はいさつの仕方を知らない不屈きものでしかなかった。

夕食を終えた私は食卓で出た”自殺”という言葉が耳に残ってリビングから自室へと逃げた。自分を無条件に肯定してくれる空間を、その不似合いな言葉が穢してしまった気がしてならなかったからである。急ぐようにドアを閉めたとき、これでようやく、と穏やかな気持ちになれた。部屋はあたたかいとは言えなかったが、私は即席のハリネズミの毛皮を脱いだ。あの汚染区域から逃げ出したいという激しい欲望は決して自分が高潔だからという傲慢な理由から来

たものではなかった。自分は屋根の下でさえも他人の顔色を変えないように行動することを自然と心がけていたし、一定の評価を得る術を体現するほどの常識人であった。だが、私はそれでも自分に残ったわずかな純潔を守るために子供じみた真似をしてしまったのである。

どうせやってしまったことだから、とついに私は自分の悪行を正当化し、吐息の白煙に耐え切れずに電気ストーブの前にそれが自分のものだといわんばかりに座った。暖を取るために居座ることがなんだか手持無沙汰な気もしてしまどきの小説を読むことにした。そりゃ君、子供というものだよ。大人なんか嫌いだ、やいクソババア。きっと私は老いても小説やドラマから学んだこういう言葉に縛られるに違いないと思った。いや、縛るのは私をコードモや老人と名付けた人ではない、自身なのかもしれない。私は大人なのだ。けれども私が大人であるから母はババアというわけではない。それと同じようにもしかしたら例の廃ビルも、元の名前があつたのかもしれない。とここで私は考えるのをやめにする。なあんだ、まだ自分は廃ビルに気が合つたのかと気づいたからである。そしてその先には”自殺”という具合ですんなりと話が進む。これじゃまるで誰かさんと同じだと思ひさむけがし、ついには知らないふりをした。しばらくするとその誰かさんが一階のほうから風呂が沸いたと言った。母は、やはり二十四を超えた私を昔の愛称で呼んだ。

風呂の水が乳白色に濁っていると、昔見たホラー映画のことを思い出されて足でも掴まれやしないかと身勝手な不安がよぎる。そのあと黒髪の女が目を剥き出しながら私を恐怖と無音の世界へと連れ去るのだ。私がいたという痕跡は乳白色の上に広がる紅い波紋だけが証明するのである。いい年をして何を考えているのだろうと身震うことで考えを捨てた。世の中の女が母のように単発だったのならいつまでも長湯が出来ただろうに。しかしながら二十四年の統計をみるとどうも自分は髪の長い女に惹かれやすいのかもしれない。黒髪がカーテンのように黒黒しくすべてを遮り、しなやかな白い四肢

がそこから見え隠れする、あのオソロシイ心地よさを望んでいるのだろう。疎ましい欲望も乳白色の水面下に沈ませることにした。

奇妙な空間に私は立っていた。視界は白いもやがかかっているおまけに薄暗い。慣れない視界に慣れるとコンクリートが私を囲んでいることに気付いた。どれもひび割れたり鉄筋がむき出しになっていた。埃っぽいビニルが空間を迷路のように見せかけ、私の侵入を阻んでいた。有害なものを体に取り入れまいと口を片手袖で覆いながら進む。やはり“正装”出なければ私の要求を満たすことはできないように、すぐにカビの混じった生暖かい空気が氣道を満たし始めた。臭いに胸を突かれそうになったとき、これはまどろみの中での出来事にすぎないことを理解した。瞬時に苦痛から解放され、心なしか呼吸と歩みが軽やかになった。ビニルの森を抜けるとそこには吹き抜けがあつた集合住宅の中庭のようにきれいに手入れされた木々と滑り台やバネの遊具が置いてあつた。あんなものでは子供が楽しめるはずもない、全くわかっていない大人たちだと少々不愉快な気分になった。ふと、しろいぶつたいが私の視界に入った。吹き抜けを挟んだ反対側にそれは居た。らせん階段の上で妖しく形を変えて大きくなってきた。私に駆け寄ってきているようだった。

白い物体の正体は女であつた。あまりに服の色が映えていたせいで黒い長髪も顔もあることに気付かなかつたのだ。女は私と数メートルの距離を保っていた。女の唇が紅い三日月へと屈伸したとき、耳元で女の声がした。

気が付けば現実へと生き返っていた。奇妙な遊歩を体験している間も生きてはいたのではあるが、今あの未知の空間では感じられなかつたものを自分はここで再確認する。時計が規則正しく脈を打ち、向かいの道路で大型トラックの轟音が時折響く。先ほどまではなかつた積み重ねがここにはあつたのである。

月が出ていたのでもう一度眠りについてみようと思ったが先ほどの白い女の台詞が私の頭で再生された。

えばーぐりーん。

女はそういったに違いなかった。もしもそれが女の名前だとしたら、おそらく時代の波に乗れなかったか個性を尊重する風潮の最先端をいつているのだろう。私はあくまでも時代遅れの街の住人だということ进行思い出し住人らしく前者を正解とすることにした。

その後は電子音のような耳鳴りが時折し、なかなか就寝することができなかったのでえばーぐりーんの女と夢をぼんやりと考えていた。

- 1

八時半にとあるオフィスでタイムカードを押す。オフィスであるがそこは仕事場ではなく、自分は軽自動車に乗って街一帯の家を回ることが仕事だ。忙しいもののしぬほど疲れることなどない。自分が社交的な一面を買われて と云ってもそんなもの生きているうちに勝手に被った皮に過ぎないのであるが それが要因となり私はここにいる。私は窓際にある自分のデスクに荷物を置いた。書類もなただ働きたそうに整理された文房具が机に並んでいる。巡りあわせによつて所在ない思いもするものでまあそれは仕方のないことだと彼らは私にさじを投じているようであった。

なあ、きみ、と所長が私を呼んだ。うんと年上であつたが忘れさせてしまうほど気さくな人間だつた。所長は私に壁の地図で同僚が担当する区域を指さし今日はここに行くようにといった。ひらめいたように私は自分の向かいのデスクを見た。案の定、灰色の平野と化していた。そういうことなのか。先を越されてしまった。長くは続けまいと思つていたがしばらく自分は働き続けなければならぬようであつた。然るべき時を見つけることもできずに、今日もこの未熟児は顔を屈折させていつてきますと言つことにした。

元同僚の名前は春川といった。春川は私より二つ年上であつたが年が近いこともありよく飲みに行くなかであつた。私は所長から渡された書類に目を通す。春川の筆跡ばかりが目につき、空席が出来

たしわ寄せが自分に来るのだと痛感した。何より苦痛だったのは春川の字を見ながら彼の仕事を自分がすることであった。彼は気の置けない仲だったはずだが今思い返せば奴は自分に気を置いていたのかもしれないと思い、過去の妄想に激しい羞恥を覚えた。勘違いをしていたのか、私は。春川なんぞいつそ居なかったのだ、そう思っ
てしまいたい。春川の痕跡がここにいるよといわんばかりに助手席から見ていた。

何軒か家をまわった頃だった。私は道路の向かいに色あせたビルを見た。車の往来のせいで不思議とそこだけが時間が止まっているように見えたからである。昨日の廃ビルであることは間違いなかった。それにしても建物に食い込むように生える蔦が余計に建物を異物へと変化させている。なぜここまで景観を乱す建物を今まで壊してしまわなかったのか、私には理解できなかった。いつかはなくなるのだらうと他人に託してアクセルを踏んだ。後ろ髪を引かれてもう一度ビルを眺めたところ、その中で人影をとらえた。その人は白い服を身にまとっているようだった。えばーぐりん、と女の声がよみがえる。あの女なのかもしれない、夢で見たのはこの暗示だったのかと思った。水増ししていた期待が消えていくのを感じてその後は廃ビルのほうを振り返らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9218z/>

死にたいきみへ

2011年12月28日21時50分発行